



やさしさと 思いやりで

笑顔がいっぱい！



認め合い励まし合いステップアップ山里っ子

受け継がれる平和への思い 第76回 平和祈念式 11.5

昭和24年11月3日に「あの子らの碑」の建立除幕式が行われました。以来、山里小では、毎年この時期に「平和祈念式」を行い、平和の誓いを新たにしています。

今年で第76回目を迎える平和祈念式は、西本徳明長崎市教育長様をはじめ、多数のご来賓にも来校いただき、献水、献花、「あの子」の合唱、そして、山里小に受け継がれてきた「平和の誓い」等を通して、皆で恒久平和を誓いました。

子どもたちは本校の卒業生で被爆体験者の榊安彦さんの祈念講話にも真剣に聞き入り、心にしっかりと受け止めていました。88歳になられる榊さんが、それだけの熱量で子どもたちへ思いを伝えてくださったからだと思います。

また、児童代表の作文発表は、子どもたちのみならず、私たち大人にも示唆を与えてくれました。多面的な視点から物事を見ることは、とても大切なことです。全文を紹介します。



山里小のシンボルの一つともいえる「あの子らの碑」。本日は永井博士が建てた「あの子ら碑」が完成してから76年の記念日です。永井博士は永遠の平和や被爆者の方々の安らかな眠りを願って、「あの子らの碑」を建てたそうです。

山里小学校の普段の学校生活の中で、「あの子らの碑」を目にすることも多く、私は日常的に戦争と平和について意識するようになりました。

私が今年の3月まで住んでいた鹿児島県には、知覧という場所があります。この街は、第二次世界大戦の時に、日本軍の「神風特攻隊」として多くの若者が、戦闘機という小型の飛行機に乗って、飛び立った場所でもあります。神風特攻隊とは、敵軍が乗っている船に、乗務員ごと突っ込んで自爆していく作戦のことです。この作戦は、戦闘機の乗務員がふるさとに戻ることはないため、帰りの燃料をつまずに飛び立っていったそうです。

知覧特攻平和会館には、当時の乗務員の写真や手紙、遺書が数多く展示してありますが、そのほとんどが、「国のため、家族のために戦います、また、会いたい、頑張っていきます、さようなら。」などのメッセージでした。私は、それらを読んで、乗務員の方への尊敬の気持ちと悲しみで胸が張り裂けそうになりました。その中でも、印象が強かった資料は、特攻隊が飛び立つときに頭に巻くはちまきの日の丸を、決意を示すために自分の血で、かいていたことです。

特攻隊員たちの恐怖と覚悟を積み込んだ戦闘機が、大空に向かって飛び立つ様子を、私は知覧で思い描きました。

長崎県に来て平和学習の機会の多さに驚きました。山里小の校内には、「あの子らの碑」「防空壕」などの戦争のつめあとが残り、原爆資料室を通して被害者の方々の当時の気持ちに触れることができます。山里小は「子ども達と一緒に成長していく資料館」としての役割も持っていると感じました。

悲しい過去は変えられませんが、それを知ることはできると思います。本日は、「あの子らの碑」の前で、今一度、平和の祈りを捧げる日にしたいと思います。

二つの街が教えてくれた戦争の悲惨さと平和への思いを、私は未来へ語りついでいきたいと思います。私は戦争などなく、みんなが笑顔の世の中になることを望みます。